

# 指導資料

鹿児島県総合教育センター

## 国語 第97号

- 小、中学校、盲・聾・養護学校対象 -

平成14年10月発行

### 基礎・基本の定着を図る国語科の学習指導と評価

基礎・基本とは、学習指導要領の示す目標及び内容の総体である。これらの定着を図るためには、児童生徒の学習状況を適切に評価し指導に生かすことが重要である。

そこで、本稿では指導と評価の一体化により基礎・基本の定着を図る学習指導の在り方について述べる。

#### 1 評価の基本的な考え方

##### (1) 評価の機能と役割

評価においては、身に付けた結果の知識の量だけを評価するのではなく、学ぶ過程で発揮された児童生徒のよい点や可能性、進歩の状況等も参考にしながら、学ぼうとする意欲、思考力や判断力などを積極的に評価しなければならない。

そのためには、学力をいくつかの側面から分析、構造化してとらえ、多面的に評価しようとする観点別学習状況の評価が重要である。これまで、この評価が取り入れられてきたが、評定のために利用されていることが多かった。そこで、評価を学習指導の改善に生かすといった評価機能を再認識して、目標に準拠した評価を進めなければならない。

##### (2) 評価規準の作成

学習指導要領に示された目標に照らして、児童生徒の学習の到達度を客観的に評価するための拠りどころとなるものさしが評価規準である。各学校では、学習指導要領に示された目標及び内容を観点別に分析し、「おおむね満足できる」状況が児童生徒の姿でみえるような学校独自の具体的な評価規準を作成する必要がある。その際、国立教育政策研究所等で作成された評価規準を参考として活用することも考えられる。

##### (3) 指導と評価の一体化

指導目標を達成させるためには、一般的に評価規準を基に、どの場面で、どのような方法で評価し、指導に生かしていくか等を配慮して指導計画を立てる。その具体的な評価方法としては、教科や学習活動の内容、発達段階、評価の観点などによって、ペーパーテストのほか、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポート等を用いることが考えられる。また、自己評価や相互評価等、児童生徒による評価も取り入れ、選択・組合せを工夫することも大事である。評価の場として、

一単位時間では、すべての観点を評価するのでなく、ねらいに即して重点化を図り、評価が指導に生かされるようにする。ここで、「おおむね満足できる」状況でない場合の手だてや、「おおむね満足できる」状況にある生徒への指導策もあらかじめ考えておく必要がある。

学習の評価によって教師の指導を改善し、児童生徒の学習状況を改善することは重要である。基礎・基本の定着を図るために、「その時、その場で、必要なこと」を指導したり、支援したりするとともに、定着が不十分な場合には、更なる指導の改善を図ることが大切である。

## 2 国語科における評価規準作成上の留意点

### (1) 目標分析と評価計画作成上の留意点

教科の目標を実現していくためには、年間を見通した評価計画をきちんと立てる必要がある。

国語科の場合は、4領域に「言語事項」を加えた5観点を踏まえて目標分析を行うことになっている。また、小学校と中学校2,3学年の各学年の目標は2学年のまとまりで示されており、学校や児童生徒の実態に応じて重点的に指導できるようになっている。そこで、年間評価計画作成の段階で、単元ごと、教材ごとに、どの領域に重点を置いた評価をしていくかをあらかじめ考えておくことが大切になる。この重点評価項目を考えておかないと、各学期末において、バランスの良い評価ができないことになる。

### (2) 具体的な評価規準作成上の留意点

評価規準を作成するに当たっては、国語科のように育成すべき能力が具体的に示されている教科では、育成すべき能力をどのような教材を使って指導すればよいかという教材分析に重点を置き、教材との関連を明確にした単元ごとの評価規準の具体化が大切である。

## 3 指導と評価の計画

単元及び単位時間の指導計画では、「学習活動における具体的評価規準」と「評価方法と評価を指導に生かす手だて」の欄を設定し、指導と評価の一体化を図る必要がある。また、「国語への関心・意欲・態度」を第1時だけに配置したり、「話す・聞く能力」を一つの活動だけで判断したりすることがないように工夫することが大切である。さらに、「言語事項」は、関連する領域に含めて評価する方が効率的であるとともに、単元テスト等で評価する項目と授業の中で評価する項目とを前もって分けておくなどの工夫も必要である。

そこで、中学校第3学年で学習する単元「情報社会を見つめる（全10時）」を例に、指導と評価計画作成の実際について説明する。

まず、「単元の指導目標」を基に「単元の評価規準」を作成する。次に、この評価規準を基に、学習活動における「具体的な評価規準」を作成し、単元における指導と評価の計画を立てる。

### (1) 学習活動における具体的な評価規準

単元(「情報社会を見つめる」)の指導目標 メディアとの関わりや、その有効な活用について興味・関心をもたせる。
---

読み取ったことを基に討論会を行い、メディアについて意見を出し合わせる。討論会を通して深まった考えを基に、論理の展開に留意して意見文を書く。マスメディアの働きや特徴を、文脈に即して読み取らせる。メディアに関する抽象的な概念を表す多様な語句を中心に理解させる。

単元の評価規準（指導目標を基に作成）		
国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	
情報社会について、積極的に読んだり、書いたり、話したり、聞いたりしながら身近な事象と関連付けて考察しようとする。	メディアについて意見を出し合い、考えを深めるとともに、相手の立場を尊重して討論に参加している。	
書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
討論会で深まった考えを基に、読み手に説得力をもって伝わる意見文を、論理の展開や構成に工夫して書くことができる。	文脈に即して筆者の主張をとらえるとともに、キーワードを基にテーマを読み取ることができる。	情報に関する抽象的な概念を表す語句について理解することができる。

(2) 指導と評価計画の具体例

単元の中で評価を進める際には次の点に留意する必要がある。

- ア 一単位時間の授業では、評価の観点を少なくする。
- イ 温かく共感的に児童生徒の学習状況を理解する。
- ウ 学習結果と過程の両面を評価する。
- エ 必要に応じて、少しずつ記録をとる。授業中「座席表」等を基に、簡単にメモをしていくなどの工夫をする。

( : おおむね満足できる状況にある生徒への指導策)  
 ( : おおむね満足できる状況にない生徒への手だて)

時間	学習活動	学習活動における具体的な評価規準					指導上の留意点 評価方法と評価を指導に生かす方策と手だて
		関 意 態	話 ・ 聞	書 く	読 む	言 語	
第1時	「マスメディアを通じた現実世界」を読み筆者の考え方や論理の組み立てを理解する。	【関心意欲態度】本単元でのねらいを、単元の扉やリード文を基にとらえようとしている。					観察 発表・挙手 学習以前に知っている知識や情報を基に発言できるように、具体的にいくつか

第2時	・全文を通読してマスメディアの働きや特徴を文脈に即して読み取らせる。	【読む】文脈に即してマスメディアの働きや特徴をとらえることができる。	の例を挙げて説明する。 ノート ワークシート 発表 自己評価 難語句等の確認を行うとともにわかりやすい表現の読み
-----	------------------------------------	------------------------------------	---

第7時	・前時に学習した【討論会の進行の例】を参考にして討論会を行う。	【話す・聞く】討論会の目的やルールを理解した上で、様々な意見を出し合うことができる。	観察法 自己評価 相互評価 討論会の司会等重要な役割を与える。 討論会のルールやマナーをその都度説明し、必要があれば発言の補助を行う。
-----	---------------------------------	--	---

第8時	・相手の発言と自分の発言との違いを基に違う立場から意見を出し合い、討論会をまとめを行う。	【話す・聞く】相手の立場を尊重した上で自分の意見を発言できる。 【言語事項】話すスピードや声量が、討論会にふさわしいものである。	観察法 自己評価 相互評価 発言しやすくようにメモを作成させる。また、そのメモに発言する順番を書かせ番号に即して発表できるようにする。
-----	--	---	--

第9時	・討論会で深まった考えを基に、意見文をまとめる。	【関心意欲態度】本単元に積極的に参加し、身近な事象との関連性にまで敷衍させることができる。 【書く】討論会で深まった考えを基に、意見文をまとめることができる。	ノート ワークシート 自己評価 相互評価 意見文での根拠となる具体事例や図書館やインターネット等で検索させる。 題材になるキーワードと教科書教材との関連性を振り返らせる。
-----	--------------------------	--	--

4 評価方法の工夫例

(1) 観点別評価と評価方法

観点別に学力を評価するためには、それぞれの観点に合った評価方法を選択す

る必要がある。評価方法の中で今後重要になってくるものは、自己評価である。これは、学習者自らが自己の学習を振り返り、次の学習への指針を見付けなければならない、自己教育力の育成につながるからである。自己評価は、この自己教育力が高まるに従い、客観性が高まる。ただし判断力がまだ十分には育成されていない発達段階での自己評価は、教師による評価や相互評価を活用しながら、評価の「ずれ」を是正していく必要がある。

## (2) 自己評価票作成上の留意点

自己評価票では、「4・3・2・1」などでの記入を求める場合と、文章の記述を求める場合とがある。評価結果の分析や評価に掛ける時間を考慮すると、「4・3・2・1」だけの記入も考えられるが、子どもの生の声を取り入れるには、やはり文章による記述を取り入れた評価票の作成が望ましい。次に自己評価票の例を挙げる。

【4よい 3ややよい 2あと少し 1もっと努力を】

観点	評価項目	評価	「4・3・2・1」の理由
関 意 態	意欲的に学習しましたか。		
	情報について、自分なりの課題を発見しましたか。		
話 す 聞 く	討論会のルールを理解した上で考えを伝えられましたか。		
	相手の立場を尊重した上で、発言できましたか。		
書 く	討論会で深まった考えを基に、意見文をまとめることができましたか。		
読 む	マスメディアの働きや特徴をとらえることができましたか。		
言 語	新出漢字や語句の意味が身に付きましたか。討論会にふさわしい声量・スピードでしたか。		
感 想			

## (3) ペーパーテストの改善と工夫

ペーパーテストは、最も一般的な評価方法で、これまでも観点別評価を取り入れた改善が進められてきており、今後ともこの改善は推進する必要がある。そこで、以下にテストの改善と工夫のポイントをまとめる。

- 1 目標に準拠したテスト問題であるか。  
(単元の評価規準との関係を踏まえて作成すること。)
- 2 個々のテストがどの観点の評価に相当するか。  
(知識・理解に当たるものが多くなるが、観点別に得点化できるよう工夫すること。)
- 3 問題解決能力や創造的な思考力を問う問題などが取り入れてあるか。  
(応用力や創造力も評価できるよう工夫すること。また、オープンエンドな問題(多答問題)を入れることで、幅広い観点で評価できる工夫をすること。)

【例】短作文を書かせる上で、児童生徒に自由にキーワードを選ばせ、具体的な事例を入れさせながら書かせる。その際の評価は、内容を端的にまとめて「書く」力や言語事項(文字力・文法力等)はもとより、児童生徒の短作文をまとめようとする意欲も見ることができる。

これまで述べてきたことを基に、適切な評価を行うためには、具体的な評価規準を適宜見直すことも必要である。そして、指導と評価の一体化を一層図り、評価方法等の工夫改善を進めることが重要である。

(第一研修室)